

二国間交流事業 共同研究報告書

令和4年4月28日

独立行政法人日本学術振興会理事長 殿

[代表者所属機関・部局]
神奈川大学・国際日本学部
[職・氏名]
特任教授・羽場久美子
[課題番号]
JPJSBP 120197905

1. 事業名 相手国: インド (振興会対応機関: ICSSR) との共同研究

2. 研究課題名

(和文) BREXIT(イギリスのEU離脱)後のアジアにおける地域統合—挑戦と展望

(英文) Regional Integration in Asia after Brexit: Challenges and Prospects

3. 共同研究全実施期間 平成31年4月1日 ~ 令和4年3月31日 (3年0ヶ月)

4. 相手国代表者(所属機関・職・氏名【全て英文】)

Pradeep Chauhan, ICSSR, Kurukshetra University, Associate Professor

5. 委託費総額(返還額を除く)

本事業により執行した委託費総額		1,893,283 円
内訳	1年度目執行経費	753,360 円
	2年度目執行経費	1,139,923 円
	3年度目執行経費	円

6. 共同研究全実施期間を通じた参加者数(代表者を含む)

日本側参加者等	5名
相手国側参加者等	2名

* 参加者リスト(様式 B1(1))に表示される合計数を転記してください(途中で不参加となった方も含め、全ての期間で参加した通算の参加者数となります)。

7. 派遣・受入実績

	派遣		受入
	相手国	第三国	
1年度目	0	0	1(1)
2年度目	0	0	(0)
3年度目	0	0	(0)
4年度目			()

* 派遣・受入実績(様式 B1(3))に表示される合計数を転記してください。

派遣: 本委託費を使用した日本側参加者等の相手国及び相手国以外への渡航実績(延べ人数)。

受入: 相手国側参加者等の来日実績(延べ人数)。カッコ内は本委託費で滞在費等を負担した内数。

8. 研究交流実績の概要・成果等

(1)研究交流実績概要(全期間を通じた研究交流の目的・研究交流計画の実施状況等)

本研究交流の最大の目的と意義は、日本とインドにおける、EU(欧州連合)をはじめとする地域共同の実態を、インド側においては、SAARC(南アジア地域協力連合)、BIMSTEC という二つの重要な地域協力・地域共同、東アジアにおける日中韓・ASEAN の地域共同に関し、恒常的に共同研究をつづけ、またインド、中国、タイの若手を育成することであり、それを実行できたことである。それは学術振興会の、コロナ禍の中でも継続させて頂いた研究支援なしには進めることができなかったもので、心より感謝している。

以下は、最初にも記した、この間の成果である。

- 1) 2019 年には、インドから、Kurukshetra 大学の Chauhan 氏を招き、青山学院大学と、京都大学で講演をして頂いた。また、2020 年には国際会議を開き、その成果として、EUSA AP(アジア太平洋 EU 学会)との共同の成果として、著書 *Brexit and After; Perspectives on European Crises and Reconstruction from Asia and Europe*, EUSA Asia Pacific, 2021. の著書を Springer から出版した。
Chauhan 氏は、Oxford 大学で PhD を取った国際政治経済学者であり、イギリスの EU 離脱後の国際政治経済について、南アジア地域連合(SAARC)や BIMSTEC について、羽場は Brexit と Corona 後の欧州とアジアの協力関係について論じた。Springer出版は広くオンラインでも刊行しているため、世界中から本研究へのアクセスがあり、学術研究発展にも貢献できたと感謝している。
- 2) 2021 年度 5 月頃に、Chauhan 氏の呼びかけで、インドで、日印の国際政治交流に関する国際会議が開かれ、羽場はそこで Key Note Speaker として報告する予定であったが、結局コロナ禍の中でそれは実現されなかった。しかし準備していたテーマで、神奈川大学の紀要に、アメリカ・オーストラリア・日本・インドによる QUAD, イギリス、ニュージーランドを加えた AUKUS などを中心に、アメリカのバイデン政権によるアジアの再編について執筆した。(『神奈川大学評論』2021 年 7 月号) その後この論文は発展させて、2021 年秋、イタリアでの国際会議で報告し、Routledge から、近刊される予定である。
- 3) この間、共同メンバーである優れたポストドク 2 名、Jawaharlal Nehru 大学で PhD を取ったインド研究者・Akanksha Singh 氏、Delhi 大学の PhD アプリカント・Joy Peter Hudson 氏、中国人 PhD 研究者・杜世鑫氏の 3 人は、エネルギー研究、国際関係研究、欧州・アジア研究などの指導を続けてきた。特に Akanksha 氏は、京都大学、北海道大学でも客員研究員として、日本・インドつなぐ優れた研究をしてきた。
- 4) 2021 年 12 月には、可能であれば、京都大学の溝端先生と共にインドに行く予定であったが、やはりコロナの再拡大のためそれはかなわなかった。しかし、昨年行った国際会議の内容を、*Brexit and After* に続き、Springer 出版から本として出版することを進め、*100 years of World Wars and Post War Regional Collaboration* が近刊予定である。
- 5) また羽場は、世界国際関係学会(ISA)アジア太平洋の会長となり、2022 年 3 月には、タイの研究者、Soavapa Ngampramuan 氏とともに、地域協力の報告をし、また国際政治の大家、Joseph Nye, American University の Quansheng Zhao, ISA 元会長の Patrick James, North Carolina University の Steven Rosefielde 氏らと、ISA の Distinguished Panel で地域共同の重要性とアメリカのアジア戦略について報告させて頂くことができた。Chauhan 氏にも報告、寄稿を頂くことで、アメリカ・欧州の世界国際関係学会でも、日・インドの研究共同の一端を報告することができたことは重要であった。
- 6) 来年 2023 年には、横浜みなとみらいで国際会議を開催予定である。アジア太平洋・インド太平洋の共同研究を広く理解して頂くきっかけとすべく、今後もインド・日本の学術関係を強化していきたい。
- 7) この3年間、インドとの学術交流によって、日本であまり知られていなかった、インドの地域協力・地域共同、SAARC(南アジア地域連合)や BIMSTEC(インドと ASEAN 諸国との共同)の活動を、学生への授業や、研究者への研究会で交流を深めていくことができた。本来はインドの社会科学院や Kurukshetra University で京都大学の溝端教授らと講演を予定していたため、毎年、コロナが収束するタイミングで何とかインドを訪問し、またインド研究者には日本を訪問して頂き、相互に研究報告研究交流ができればと考えて計画をしていた。

それが結局、長引くパンデミックや何度もの感染拡大の山があったこと、また特にインドが世界のトップファイブの形で感染が拡大したこともあり相互の学術交流を現実に訪問して行うことができなかったのは極めて残念である。しかし、それをオンラインの国際交流や国際会議への参加要請、またメールや雑誌編集を含む実質的な研究報告、研究執筆で補うことができた。協力して下さった Pradeep Chauhan 教授、京都大学の溝端教授、北海道大学のスラブ研究センターにも感謝する次第である。

これを契機に、今後も日インドの学術研究協力、若手育成に貢献していくことができれば幸いである。

学術振興会の支援が、日本・インド、さらには日本とアジア諸国との交流発展に大きく貢献して頂いたことに心より感謝し、さらなる学術・研究交流と若手育成に尽力したい。

(2)学術的価値(本研究交流により得られた新たな知見や概念の展開等、学術的成果)

1)これまで十分知られていなかった、インドの地域協力、SAARC や BIMSTEC を、世界最大の版図を持つ Springer 出版から、2 冊の本を書籍化することによって世界の研究者に知らせていくことは大きな意義があったと考えている。

2)またオンラインではあったが、学術会議で 2 度、また世界国際関係学会でも 1 度、さらにそれぞれの小研究会を通して、世界や日本の研究者にも、共同研究の毎年の成果を広く伝えていくことができた。

3)さらに、インド、中国、タイの若手研究者を、日本において育成し、世界の学会で報告してもらうことができたことも大きな成果と考えている。この間、Akanksha Singh 氏、杜世鑫氏、Joy Peter Hudson 氏は、羽場久美子とともに、2019 年、ISA Asia Pacific シンガポール大会で、2020 年、EUSA Asia Pacific の Australia 大会で、さらに、2021 年の ISA Nashville 年次大会で、オンラインを含めてそれぞれ報告し、研究を深め発展させていくことができた。

貴重な成果となったと感謝している。

(3)相手国との交流(両国の研究者が協力して学術交流することによって得られた成果)

1 年目の 2019 年は、インドから研究者を呼んで青山学院大学、京都大学で、講演と交流を深めることができ、感謝しているが、後は、すべてオンライン交流となった。上にも記載したが、世界的なパンデミックの流行のため、本来は、インドの社会科学学院や Kurukshetra University で京都大学の溝端教授らと講演を予定していたし、またインド研究者には日本を訪問して頂き、相互に研究報告研究交流を行う予定にしていた。それが結局、長引くパンデミックや何度もの感染拡大の山があったこと、また特にインドが世界のトップファイブの形で感染が拡大したこともあり、相互の海外学術交流を現実に訪問して行うことができなかったのは極めて残念であった。

しかし、それでも、継続的に、2020 年、2021 年はオンラインで、国際会議を行い、繰り返し Chauhan 氏に参加して頂くことができたし、羽場は最終的に 2022 年 3 月に、学内の予算で、アメリカの世界国際関係学会に参加し報告することで、3 年間の学術交流を完結することができたことに感謝している。それは、2 冊の書籍、*Brexit and After, Perspectives on European Crises and Reconstruction from Asia and Europe* (Springer, 2021). *100 Years of World Wars and Post-War Regional Collaboration, How to create New World Order?* (Springer, 2022). に結実することができた。こちらも深く感謝している。

(4)社会的貢献(社会の基盤となる文化の継承と発展、社会生活の質の改善、現代的諸問題の克服と解決に資する等の社会的貢献はどのようにあったか)

日本・インドの 2 国間の地域共同研究を、19 年、20 年、21 年の 3 度の学術会議を交えた国際会議、国内会議で報告することで、社会においても、インドとの交流の重要性を訴えることができたことは、成果であろうと思う。またこれをきっかけにして、現在、EU 本部に対し、インド太平洋とアジアの連携に関する大型の研究申請を、New Zealand の Martin Holland を中心として、20 数か国の共同研究の日本からの代表として、加えて頂くことになり、今後も継続して、インド太平洋とアジア・欧州との連携を発展させていく契機となった。感謝申し上げたい。

(5)若手研究者養成への貢献(若手研究者養成への取り組み、成果)

これについては、大きな貢献をなしたのではないかと自負している。

何より、この 3 年間の研究活動の中で、Akanksha Singh 氏、Joy Peter Hudson 氏、杜世鑫氏、Soavapa Ngampramuan 氏という 4 人の若手研究者を育て、論文を執筆して投稿し、国際会議で報告するなどを支援することができたことは、大きな成果であった。それぞれは、勤勉に研究をつづけ、大きな成果を上げた。

特にタイの Soavapa 氏は、この共同研究をきっかけに、メコン川やドナウ川の比較共同研究により、中国や欧州、アメリカでも活躍し、書籍も刊行することができた。

(6)将来発展可能性(本研究交流事業を実施したことにより、今後どのような発展の可能性が認められるか)

3 つの発展の継続性と可能性を持っている。

- 1) 上記に挙げたように、現在 EU とインド・太平洋の地域統合に関する共同研究を、New Zealand から申請しており、これが実現すれば、3 年間、EU とインド太平洋各国 20 カ国との共同研究が進展する予定である。神奈川大学・羽場はその一端を担っている。
- 2) この 3 年間は、コロナ禍で実際にインドに行って交流することはかなわなかった。
しかし、新たに、2022 年度より 5 年間、学術振興会の科学研究費(基盤 B,22H02821)で、欧州とアジアの紛争地域境界地域の平和構築に関する研究に資金を頂くことができた。これにより、インドの境界線における平和構築にも引き続き関心を持って研究していきたいと考える。また機会が許せば、その基金でインドの境界線地域に調査研究に行くことも考えている。
- 3) さらに、2023 年に、インド太平洋の国際会議を、報告者 400 人規模で、神奈川大学みなとみらい校舎で開くことにしており、そこにおいてもさらにインド太平洋における地域協力・地域共同の研究を進めていきたい。
- 4) この共同研究で育成した若手研究者たちが次々に大きな成果を上げている。タイの Soavapa 氏については、他の共同研究も含めて多くの研究成果を出してきているし、Akanksha 氏も青山学院大学、京都大学、北海道大学で研究報告を続け、また ISA Asia Pacific でも大学院生の共同執行部として協力してくれている。また Hudson 氏は、デリー大学でのドクター号を近々獲得予定であり、杜世鑫氏は今後中国に帰って活躍予定である。若手研究者を育成でき、今後の発展に貢献することができたことは、本研究成果のおかげであり感謝している。

(7)その他(上記(2)~(6)以外に得られた成果があれば記述してください)

例:大学間協定の締結、他事業への展開、受賞、産業財産権の出願・取得など

基本的には、上記にすべて掲げたが、今後、欧州に本部のある世界国際関係史学会(羽場は日本代表理事)に、本共同研究の Chauhan 氏や、Soavapa 氏など、共同若手研究者を理事会のメンバーとして推薦したこともあり、日・インドの協力関係を欧州でも推進していけることができるようになったのは大きな成果であると思っている。今後インドの大学との大学間協定、学生の受け入れ、日インド関係を欧州、アメリカにおいても発展的に展開していきたいと考えている。